

隋の莫高窟における弥勒経变相図の成立について

おりやま けいこ

折山 桂子 (京都大学)

発表
要
旨15
時
45
分
|
16
時
25
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ール

敦煌莫高窟に残る北魏の交脚菩薩像と隋の弥勒経变相図はいずれも兜率天における弥勒を表現したと考えられており、主題が同じことから両者には連続性があるように思われる。しかしその中間期である西魏・北周には弥勒菩薩と同定しうる表現はほとんど認められない。作例数の増減は莫高窟における信仰の変化を示すと考えられるものの、当該変化の理由や、隋に入り再び弥勒が表現されるようになる契機に対し、これまで十分な検討が加えられてきたとは言い難い。

北周に弥勒の表現が減少する点については、弥勒以外の信仰も含めた広い視野での検討が求められよう。本発表ではその前段階として、隋に入り弥勒経变相図を表現し始める点につき、莫高窟の作例や第17窟から発見された敦煌文献を手がかりに、その背景に関する見解を提示する。

まずは検討に先立ち莫高窟の北朝・隋の弥勒の表現を通覧し、作例数の変化を確認する。続いて、隋に入り弥勒が再び主題として扱われるようになる契機として、第262窟維摩詰経变相図・弥勒経变相図の内容に着目する。隋の弥勒経变相図付近にはしばしば維摩・文殊の対問の場面が表現され、これは維摩詰経中で同経の宣揚を弥勒に託すためとされる。当該表現は雲岡石窟等では北魏から確認できるが、莫高窟では隋に入り初めて見られるようになるため、敦煌外部からの情報の流入があることは疑いがない。経典の図像化という点では他の变相図に比べ作例数も多く、当時の莫高窟における人気の高まりが窺われる。他方、第262窟の維摩詰経变相図に特徴的なのは、維摩・文殊の対問の他、同経で言及される須弥山や阿修羅とみなしうる表現があり、それらと繋がるように弥勒の住まう兜率天の様子が描かれる点である。

このように弥勒経变相図は当初維摩詰経变相図の一部であったが、次第に兜率天上の弥勒の部分が重視され、一つの主題として扱われるようになったという経緯を発表者は推測する。その背景として、図像の制作面では、隋に入りなされた復仏とそれに伴う遺物の修復という復興的な雰囲気等があると考えられる。隋初期の窟には西魏以前に開かれた窟に見られるアーチ形の天宮、中尊に対し合掌する脇侍といった表現が認められ、莫高窟内部での古典学習やそこからの表現の展開が窺われる。また、思想面では、敦煌文献中の写経に付された題記から、敦煌の人々が現世を厭い、死後の極楽世界を希求する様態を確認できる。このような中で兜率天上の弥勒が再度注目されるようになったと推測する。

以上のとおり本発表の目的は、隋に入り弥勒経变相図が制作され始めた契機について、維摩詰経に関する表現の敦煌への流入とそれに伴う兜率天上の弥勒の図像化がある点を指摘し、復仏の気風の中で弥勒及び兜率天が再注目され、弥勒経变相図が単独で制作されるようになったという経緯を明らかにする点にある。